最近、ミレニアムの生徒会室にシャワールームが併設された。
ユウカ曰く、「泊まり込みで会計の仕事をしないといけない時に便利だから」だそう。
近くにある24時間営業の銭湯にでも行けばいいのでは？と思ったが、あれだけ財布の紐が堅いユウカがOKしたなら、いいのだろう。

ある朝、ユウカに野暮用があったため生徒会室を訪れたが、誰もいなかった。
いつもはユウカが来ている時間だから、あれ？と思ったが、どこかに用事でも出来たのだろうか。
自分の机に近づく途中、ユウカの机の上にピンク色の物体があるのが目に入った。
遠目では分からなかったが、机に近づくとすぐにそれが何かわかった。

ブラジャーだ♡

新品というにはあまりに乱雑に置かれているブラ♡
かわいいレース付きの、デカパイ専用サイズのブラ♡
爆乳女子に勝負下着でこれを着けてこられたら興奮待ったなしだろう♡

「まさか、ユウカのブラジャーなのか･･･？」

思考を巡らせていると、むわぁ･･･♡と女の子特有の甘い匂いがブラジャーから漂ってくる。

「はぁ･･･♡はぁ･･･♡」

まともな思考をできる状態からどんどんかけ離れていく。も、もしかしたら落とし物を拾ってとりあえず置いていただけなのかも･･･♡
あのユウカが自分のブラジャーを机の上に置いておくわけないし･･･♡ユウカのじゃないなら･･･いいよな･･･♡♡

「ちょ、ちょっとだけなら･･･♡」

ブラジャーを手に取り匂いをかいでみた♡

「ふぁぁ･･･♡いい匂い･･･♡♡」

どこかのデカパイを包みこんでいたブラジャー･･･♡
まるで女の子とハグしているような、ふわ～ん♡とした気持ちになる･･･♡♡
優しい包容力が俺を包み込む･･･♡これを着けている女の子は、一体どんなデカパイの持ち主なのだろう･･･♡♡

きっと、知らぬ間に自らのどたぷんおっぱいで周りにいる男子を惑わしているに違いない･･･♡
視線を釘付けにし、次々と周りの男子を前傾姿勢にさせる破壊力･･･♡
一度でいいからこの子の生おっぱいを拝んでみたいものだ･･･♡

「ふぅ･･･♡ふぅ･･･♡♡」

想像を膨らませていると、ユウカの机の上に置かれていたノートに何かが書かれているのを見つけた。

『これは早瀬ユウカのブラジャー(着用済み)です♡』

「！？！？！？」

い、意味が分からない･･･。いや、分かるのだが、なぜこんなことが書かれているのかが分からない･･･が、今はそんなことはどうでもいい･･･♡
これがユウカのブラジャー･･･♡甘～～い女の子の匂いがする･･･♡♡ブラジャーに顔をうずめながら、ユウカの姿を頭に思い浮かべる･･･♡♡

「ユウカ･･･♡ユウカぁ･･･♡♡」

すぐにパンツを下ろし、オナニーを開始した♡♡
ドスケベボディのユウカを、いやらしい目つきで舐めまわすように想像上で思いっきり視姦する･･･♡♡

「ユウカのどたぷんおっぱい･･･♡ユウカのむちむち太もも･･･♡ユウカのぷりぷりデカ尻･･･♡」

――シコシコ♡♡シコシコ♡♡

いつもはユウカにいやらしい目で見ていることを悟られないようにしていることもあってか、より一層興奮する♡♡
ずっとコソコソ見ていたドスケベボディを、着用済みブラジャーという最高のオカズで堪能できるなんて･･･♡♡

「ユウカ･･･♡真面目な顔してこんなエッチなブラ着けて･･･♡後で指導が必要だ･･･っ♡出る･･･っ♡」

――びゅくっ･･･♡どぷどぷっ･･･♡♡

「はぁ･･･♡はぁ･･･♡教え子のデカブラをオカズにオナニーするの気持ちよすぎ･･･♡♡」

射精した後も妄想と右手が止まらない♡

――シコシコ♡♡シコシコ♡♡

ぽよんぽよんと弾むデカパイ･･･♡あのおっぱいで全身ぱふぱふ包まれて･･･♡ちゅぱちゅぱ♡って授乳手コキしてもらって･･･♡
最後はチンポをむぎゅ～っ♡って挟んでパイズリ♡たぱん♡たぱんっ♡っておっぱいの打ちつけ音聞きながらふっかぁ～い谷間で幸せぴゅっぴゅ♡
あぁ･･･♡死ぬほど気持ちいいんだろうなぁ･･･♡一度でいいから味わいたい･･･♡

――どぷっっ♡♡♡びゅくっ･･･♡♡

「あぁ･･･っ♡病みつきになるぅ･･･っ♡」

教え子の着用済みブラジャーをオカズにするという罪悪感が、快楽を何倍にも増幅させる♡
これに味をしめてしまったら、間違いなく普通のオナニーには戻れないだろう･･･♡♡

「はぁ･･･♡はぁ･･･♡･･･ん？」

机の下に半開きの段ボール箱を見つけた。何が入っているのか覗いてみると･･･

なんと、そこには箱ぎっしりに詰まったブラジャーがあった♡
置いてあったメモに書いてあったのは･･･

『私が持ってるありったけのブラジャーを集めました♡たくさん使ってください♡♡by ユウカ♡』

「なっ♡なんで･･･っ♡なんでこんなところにっ♡大量のユウカのブラジャーがあるんだっ♡しかも使ってくださいって♡ユウカっ♡絶対確信犯だろっ♡♡先生を♡先生をなめてるのかっ♡あいつっ♡♡絶対後でお仕置きしてやるからなっ♡♡くそっ♡くそ･･･っ♡♡」

――がしっ♡♡ばさぁっ･･･♡♡

段ボール箱からありったけのブラジャーを掴み、顔に押し当てる♡♡あぁ･･･♡♡最高･･･♡♡
ブラジャーのあっま～～～い♡♡匂いを全身に受け、全力オナニーを始めた♡♡

――シコッ♡♡シコシコ♡♡シコシコッ♡♡

「ユウカ♡♡ユウカのブラジャー♡♡甘くていい匂いっ♡♡たくさんのユウカを独り占めしてるみたいぃ♡♡もっと♡♡もっといっぱい味わいたいっ♡♡」

――がっ♡♡ばさっ♡♡
――シコッ♡♡シコシコ♡♡シコシコ♡♡シコシコッ♡♡

「ユウカっ♡ユウカ好きっ♡ユウカと付き合ってイチャイチャしたいっ♡♡おっぱいぱふぱふしたり太ももむにむにしたいっ♡♡ドスケベタンクの体独占したいっ♡♡」

――がしっ♡♡ばさぁっ･･･♡♡ふわぁ･･･♡♡♡
――シコシコ♡♡シコッ♡♡シコシコ♡♡シコシコ♡♡シコッ♡♡シコシコッ♡♡♡

「あっ♡ああっ♡♡ユウカ♡ユウカぁ♡気持ちいいよユウカ♡♡ユウカ出るっ♡ユウカのどたぷんおっぱいに♡ユウカのムチムチ太ももに♡ユウカのプリプリデカ尻にっ♡ドロドロザーメンぶっかける♡♡全部♡全部受け止めて･･･っ♡」

――びゅくっ♡♡びゅるっ♡♡♡♡どびゅるるっ♡♡♡♡

「うっ･･･♡は･･･あっ･･･♡ユウカ･･･♡♡ユウカ好きぃ･･･♡♡」

いつの間にか仰向けになり、ユウカのブラジャーが全身を覆っていた･･･♡♡
ブラジャーの甘い匂いと精液の匂いが混じった独特な空気が流れている･･･♡♡
なんともいえない幸福感が全身を包み込む･･･♡♡

「はぁ･･･♡はぁ･･･♡や、やばい･･･いくらなんでもちょっとやりすぎた･･･」

辺り一面をブラジャーが埋め尽くしている中心に半裸の男が寝そべっているこの状況を誰かに見られでもしたら･･･。
考えただけでもゾッとした。

「は、はやく片付けないと･･･」

――カツ。カツッ。

我に返った瞬間、足音が聞こえた。

「ふふっ･･･♡案の定、引っかかってくれましたね先生･･･♡」

「ユ、ユウカ･･･！？」

見上げるとそこには前開きの白Ｙシャツを羽織った下着姿のユウカがいた♡
デカパイがぶるん♡たぷっ♡と大きく揺れている♡♡

「計算通り･･･♡先生なら絶対に引っかかってくれると思ってました･･･♡
私の好意に気づいてくれないのが悪いんですよ･･･？♡」

「な、なっ･･･！？」

「先生がこの前提出した領収書の店、ネットで検索したんです･･･♡とってもいかがわしいお店でした･･･♡
その店の『ぱふぱふオプション♡♡』というのがあって･･･♡下着姿になった女の子のおっぱいに顔をうずめさせてくれるんですよね･･･♡
領収書にきちんと『P オプ』って書かれていましたの、見ましたよ･･･？♡」

「し、調べたのか･･･！？」

「はい･･･♡やっぱり先生は女の子の下着が大好きなんですね･･･♡私のブラジャーに全身をうずめておちんちんシコシコ♡♡せーえきどぴゅぴゅ～♡♡ってするくらいですから･･･♡」

「ぜ、全部見られて･･･！」

「こうでもしないと先生は振り向いてくれないんですから･･･♡強行突破です♡まずは･･･えいっ♡♡」

――たぷぅ♡♡もちぃ･･･♡♡♡

ユウカにぐっと抱き寄せられ、強引に顔をおっぱいに押し付けられる♡♡♡
マシュマロみたいな柔らかぁ･･･い♡ふわふわおっぱい･･･♡♡♡
机の上に置かれていたブラジャーよりも強烈な匂いが全身を包み込む♡♡♡

「えっ♡あっっ♡♡･･･おっぱい♡♡ユウカのおっぱい♡♡教え子デカブラどたぷんおっぱいっ♡♡♡♡」

一瞬何が起こったか分からなかった♡♡だが、すぐにユウカの強烈なフェロモンに理解(わか)らされた♡♡

「じゃあ･･･♡おっぱい顔にうずめたまま･･･たぷたぷしちゃいま～す♡♡♡」

乳肉ウェーブ♡♡♡
たぷんたぷん♡♡♡と揺れるおっぱいが顔を撫でる♡♡♡
教え子おっぱいの極上マッサージ♡♡♡

――ずにゅぅ～♡たぷっ♡ぐにゅっ♡むにぃ♡

顔が動いてブラジャーのレースがコリっ♡コリっ♡と当たるのがこそばゆくて気持ちいい♡

「あぁっ♡夢みたいだっ♡マシュマロおっぱいでとろける♡♡ユウカのデカパイで昇天しちゃうっ♡♡」

――たぷぅ♡♡むにっ♡♡むにぃ♡♡

「ふ～っ♡♡ふ～っ♡♡もっと･･･♡♡おっぱいもっとぉ♡♡」

「ふふっ･･･♡先生、嬉しそう･･･♡そんなに私のおっぱいで興奮しちゃったんですか･･･？♡」
「でも、まだまだこんなものじゃあないですよ･･･♡私の気持ちを分かってもらえるまで、今日はたっぷりお時間いただきますね･･･♡♡」

ユウカが机の上に座り、太ももを軽くポンポンと叩く♡
ニヤニヤした顔でブラを外し、掴んだおっぱいを俺の方に向けている♡
これは･･･間違いない♡授乳♡授乳のサインだっ♡

「ちゅ･･･ちゅぱちゅぱするっ♡ユウカの生おっぱいじゅるる～♡って吸うっ♡ユウカの甘～いお汁いっぱい飲むっ♡」

「も～先生ったら･･･♡焦らなくてもおっぱいは逃げませんよ♡はい♡ど～ぞ♡」

――ちゅぱっ♡ちゅぱ♡じゅるっ♡ちゅっ♡

「ママっ♡ママおいしいっ♡♡ユウカママのデカパイちゅーちゅーたまらん♡♡ママっ♡♡ママぁ♡」

「やんっ♡先生がっつきすぎですよ♡」

「だってだって♡ユウカママのおっぱい美味しすぎるからっ♡」

――じゅるっ♡ちゅっ♡ちゅぱぁ♡♡じゅる♡ちゅぱっ♡

「おっぱいおっぱいおっぱい♡おっぱいすきぃ♡♡ちゅぱちゅぱ最高なのぉ♡♡もっと♡♡もっと吸うっ♡♡あっ♡♡あああっ♡♡」

――どぴゅっ♡♡♡ぶぴっ♡♡びゅくっ♡♡♡びゅるっ･･･♡♡♡♡

「ふぁ･･･♡あっ･･･♡」

興奮しすぎてチンポに触ってないのに射精してしまった♡

「あ～♡もしかして先生･･･♡ズボンの中で射精しちゃったんですかぁ？♡」

「んっ･･･♡くぅ･･･♡」

「気持ちよすぎて聞こえてないじゃないですか･･･♡じゃあ、確認するのでズボン脱ぎ脱ぎしてくださ～い♡」

ほとんど射精を確信しているしたり顔で俺のズボンをいそいそと脱がすユウカ♡
ズボンに出来たシミの近くですん♡すん♡と精液の臭いを嗅いでいる♡

「うっ･･･♡くっさぁ･･･っ♡♡」

――ぶるんっ･･･♡ビキッ･･･♡ビキ･･･♡

――どっ･･･ろぉ･･･♡どぷっ･･･♡ぴゅくっ♡

とんでもない量の精液とガチガチに勃起したチンポがパンツの中から飛び出してきた♡

「ちょっと先生･･･♡これはどういうことですか？♡」

――ふにっ･･･♡にぎ･･･♡にぎ･･･♡

「あっあっ♡ち、ちがうのぉ･･･♡♡ユウカのおっぱいが美味しすぎてぇ･･･♡♡」

「触ってないのに射精して、しかもまた勃起するなんて節操なさすぎです♡そんな先生にはお仕置きが必要ですね･･･♡えいっ♡」

――ちゅこっ♡しこしこ♡ちゅこ♡しこしこっ♡ぐちゅっ♡

ユウカのちっちゃくてかわいい手が激しく俺のチンポをしごき始めた♡

「ああっ♡ユウカっ♡射精したばっかりなのにそんな激しくしたらっ♡」

「先生が悪いんですよ？♡生徒のおっぱい吸いながらノーハンド射精しちゃうなんて♡」

――ちゅこっ♡ちゅこ♡しこしこっ♡ぐちゅっ♡

――ちゅぱっ♡ちゅぱっ♡ちゅぱ♡じゅるっ♡ちゅっ♡

「あっあっ♡母乳おいしっ♡ユウカママのおてても気持ちよすぎてっ♡こんなの我慢できるわけないよぉ･･･っ♡」

――ちゅこっ♡しこしこ♡ちゅこ♡しこしこっ♡

――ちゅぱっ♡じゅるっ♡ちゅっ♡ちゅぱぁ♡♡じゅる♡ちゅぱっ♡

「ダメです♡いい大人なんですから、ちゃ～んと我慢してくださいね？♡」

「やだっ♡ママっ♡出るっ♡おっぱいちゅぱちゅぱしながらママのおててにせーえき出ちゃうう･･･っ♡」

――びゅくっ♡どぷっ♡

――どぽっ♡ぶぴっ･･･♡どろぉ･･･♡

「あ～あ･･･♡ダメって言ったのにこんなに射精しちゃって･･･♡ワガママなおこちゃまですねぇ･･･♡そんなにお仕置きして欲しいんですか･･･？♡♡ほんと、いけない子･･･♡♡♡」

されるがまま、正座したユウカの太ももの上に腰を置き膝上パイズリの姿勢になる♡

「さっきはいきなり射精しちゃいましたから･･･今度は許可するまで射精しちゃダメですよ？♡♡」

「えっえっ･･･♡そんなぁ･･･♡」

「ふふっ･･･♡じゃあ、さっそく挟んじゃいます･･･♡」

――むぎゅっ♡ぎゅむ～～～っ･･･♡

「あっあっあっ･･･♡ちょ、ちょっとユウカ･･･♡乳圧エグすぎ･･･♡」

――ガチ･･･♡ビキ･･･♡

「あと、これも必要ですよね♡」

片腕でぎゅむっ♡とおっぱいを抱きかかえ、上から谷間にローションを垂らし始めた♡

――とろぉ～～･･･っ♡

「よいしょ･･･っ♡」

――くちゅっ ♡ぬちゅっ♡ぬとぉ･･･♡ぬりゅっ♡

左右のおっぱいを交互に動かしてまんべんなくローションをなじませるユウカ♡
いやらしい音と亀頭をなぞる弱い刺激が期待感を高める♡

「これで滑りがよくなりましたね･･･♡じゃあ、早速･･･♡♡♡」

ニヤニヤ･･･♡♡♡

――どちゅっ♡だぱっ♡ばちゅん♡どちゅ♡♡だぱんっ♡どぱっ♡♡ぱんっ♡たぱっ♡♡どちゅっ♡どちゅっ♡♡ずりゅ♡♡♡たぱんっ♡♡♡

「おっ♡♡♡♡♡♡ユ、ユウカっ！？♡いきなり全力なんて♡♡そんなっ♡♡普通はゆっくり始めるものなんじゃ♡♡あっ♡♡あっあっ♡ダメっ♡♡イクイクイクっ♡♡」

――どぴゅっ♡♡♡びゅくっ♡♡♡びゅるっ･･･♡♡♡♡ぶびゅるるるるっ♡♡♡♡♡♡♡♡

まさかの全力スタート♡射精欲が最高速度で駆け上がり、我慢できずに暴発してしまった♡♡
少しでも長くユウカのパイズリを堪能していたかったのに･･･♡♡

「あっ、あ･･･っ♡こ、こんな濃いの出るの初めて･･･♡おっ･･･♡♡」

「あれ～？♡先生、暴発射精しちゃったんですかぁ？♡許可するまで射精したらダメって言ったのに･･･♡」

したり顔で意地悪に話しかけてくるユウカ♡♡

「でも、びっくりしちゃってる顔、とってもかわいかったですよ･･･？♡じゃあ、パイズリはこれでおしまい･･･♡♡♡」

――ビキ♡♡

「えっ♡♡もう終わりなんてっ♡♡やだっ♡♡もっとユウカのパイズリ味わいたいっ♡♡」

「ダメですよ♡♡だって、許可してもないのに射精しちゃったじゃないですか♡」

――ビキ･･･♡♡

「お願いお願い♡♡ユウカにパイズリして欲しいっ♡♡」

「じゃあ、今後一切そういうお店に行かないって約束してください♡♡」

――ビキ♡ビキキッ♡♡

「するっ♡♡約束する♡♡もういかがわしいお店なんか行かないからっ♡♡」

「必死になっちゃって･･･♡かわいい♡♡わかりました、じゃあ特別に２回戦してあげますね･･･♡♡♡」

――ビキ♡ビキッ･･･♡♡ビキビキ♡♡ビキッッッッッッ♡♡

期待感でチンポがはち切れそうだ♡早く･･･早くあの快感をもう一度味わわせてほしいっ♡♡

「じゃあ･･･♡精液でドロドロになった谷間を･･･♡全力で閉じま～す♡」

――どちゅんっっっっっ♡♡♡♡♡♡♡

「おっ･･･♡」

すさまじい乳圧に腰が浮いた♡さっきの全力パイズリがフラッシュバックしてきて、我慢汁が大量にあふれ出す♡♡♡

――ぶぴっ･･･♡ぶぴゅっ♡♡♡♡

「精液だけじゃなくて我慢汁まで･･･♡ローションなんてもう必要ないですね♡じゃあ、２回戦開始～♡」

――ぱんっ♡♡だぱんっ♡♡ぱちゅっ♡♡たぱっ♡♡♡ぱちゅん♡♡♡ぱちゅ♡♡ぱんっ♡♡♡

「えいっ♡えいっ♡」

――どちゅっ♡ぱちゅっ♡♡ずりゅっ♡だぱっ･･･♡♡ぱんっ♡♡♡たぱんっ♡♡♡ぱんっ♡

「上からぎゅむ♡って押さえつけるシンプルズリ～♡」

――ぱちゅ♡だぱっ♡ぱちゅっ♡♡ぱんっ♡♡♡たぱんっ♡♡♡ぱん♡ぱんっ♡

「カリ首にまんべんなく刺激を与える左右互い違いズリ～♡」

――ずりゅっ♡♡たぱっ♡♡ずりゅ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡どぱっ♡♡ぱんっ♡♡♡

「両側から腕でぎゅむっ♡って挟んで上下に動かすノーハンドズリ～♡」

――だぱっ♡だぱんっ･･･♡どぱっ♡♡ぱんっ♡たぱっ♡♡たぱんっ♡♡♡ぱちゅっ♡♡♡

「おっ♡まるでパイズリ博覧会っ♡こんなの耐えられるわけないのにぃ♡♡♡」

「私にかかればこれくらいお手の物です♡さぁさぁ、どんどん行きますよ～♡」

――ぱんっ♡♡だぱんっ♡♡ぱちゅっ♡♡たぱっ♡♡♡ぱちゅん♡♡♡ぱちゅ♡♡ぱんっ♡♡♡

「あっ♡ユウカ好きっ♡またイクっ♡イッちゃうっ♡」

――ぴたっ･･･♡

ユウカは射精直前にパイズリをやめた♡まるで俺の射精タイミングを完璧に計算していたかのように♡♡

「えっえっ♡なんで止めるのっ♡おちんちん寂しいよぉ♡」

「先生･･･♡まだ私に謝らないといけないことがあるんじゃないですか･･･？♡♡」

ユウカがニヤニヤしながら問いかけてくる♡

「な･･･っ！？な、なんだそれはっ♡♡そんなものはないっ♡♡」

ユウカをいつもいやらしい目で見ていたことだと一瞬で理解した♡♡･･･だが、全力で否定した！
ここまでやられっぱなしだった俺にも、先生としての矜持がほんの 1mm だけ残っていたから！
情けないと分かっていても、抗うことを選択したのだ！

「正直に言った方が楽になれますよ？♡♡」

「ふ、ふん･･･っ♡ないと言ってるだろ･･･っ♡」

ここで屈するわけにはいかない。教育者として、少女たちを正しい道に導く先導者としての自覚を保つための最後の砦を失うわけにはいかないから！

「ここまでされたんだから言っても同じです♡♡早く言っちゃいましょう？せんせい♡」

「ぐっ･･･♡こ、このっ･･･♡」

答えが何か分かっているくせにいじわる顔で問い詰めてくるユウカ♡
扇情的な表情が決意を揺るがせる･･･♡

「言ってくれたら～♡このドスケベおっぱいのパイズリ再開してどぴゅぴゅ♡びゅるるぅ～♡って最高に気持ちいい射精♡させてあげます♡♡」

「な、なにっ･･･♡」

――どたぷんっ♡むちぃ･･･♡ぶるんっ♡♡♡

今、ここで言えば･･･♡このどたぷんおっぱいで最高の射精をさせてもらえる･･･♡

「ほら、早く早く～♡謝らないといけないこと、ありますよね？♡」

「な、ない･･･っ♡」

――ぶるん･･･っ♡どたぷっ･･･♡ゆさっ･･･♡♡

「ありますよね？♡♡」

「ふ～っ･･･♡な、ないって･･･っ♡」

――むにゅ･･･♡♡にゅむっ♡♡♡ふにぃ･･･♡ぎゅむぅ♡♡

「ありますよね？♡♡♡」

「ふ～っ･･･♡ふ～っ･･･♡な、ない♡ないないっ･･･♡あるわけないっ♡♡」

――どたぷんっ♡むぎゅっ♡♡ぶるんっ♡♡♡♡むちぃっ♡♡♡♡

「最後のチャンスです･･･♡ありますよね、せ・ん・せ・い♡」

――ぎゅむっっっ♡♡ぎゅ～～～～～～～っっっ♡♡♡♡♡

――――プツンッ。

「あ、ありますぅ♡♡♡実はっ♡♡ユウカのこといつもエッチな目で見てましたっ♡♡ユウカの長乳ドスケベおっぱい♡ユウカのムチムチぶっとい太もも♡ユウカのプリプリもちもちデカ尻もっ♡全部全部いやらしい目で見てましたぁ♡ごめっ♡ごめんなさいっ♡♡もうっ♡もう絶対見ないから許してええっ♡♡♡」

「あはっ♡全部言っちゃいましたね♡いい大人がそんな恥ずかしいこと♡♡いいですよ♡ぜ～んぶ許してあげます♡♡♡」

――ぱんっ♡だぱんっ♡どぱっ♡♡ぱちゅんっ♡♡たぱんっ♡♡ぱんっ♡♡ずりゅ♡♡♡ぐちゅっ♡♡たぱんっ♡♡♡ばちゅんっ♡♡ぬちゅっ♡♡どぱっ･･･♡♡ばちゅん♡♡

「でも･･･♡これからも見てもいいですよ？♡♡今までみたいに♡汗だく体操着から透けてるブラを見たり♡♡パンツスーツのパン線凝視したり♡ペンを拾おうと前かがみになった時にしれっとパンツ覗こうとしたり♡重すぎて机の上にむにゅん♡って置いて休ませてたドスケベ長乳どたぷんおっぱいチラ見したり♡パツパツＹシャツの隙間から見えるふっかぁ～い♡谷間に鼻息荒くしても♡♡ぜ～んぶ♡♡許してあげますから♡♡」

「えっ♡♡なんでっ♡♡全部･･･そんなことまでバレてっ♡♡あっ♡♡あっあっ♡♡」

――ばちゅんっ♡♡だぱっ♡だぱんっ♡ぐちゅっ♡♡どぱっ♡♡ぱんっ♡たぱんっ･･･♡♡♡どぱっ♡♡ぬちゅっ♡♡ずりゅ♡♡たぱんっ♡♡ばちゅん♡♡

「イケっ♡イケっ♡いつもスケベな目で見てた教え子おっぱいにたくさん中出ししろっ♡♡♡頭空っぽにして濃厚ドロドロザーメンコキ出せっ♡♡ほらっ♡♡ほらほらっ♡♡♡♡♡」

――どちゅっ♡♡♡だぱんっ♡どぱっ♡♡ぱちゅんっ♡♡たぱんっ♡♡ぱんっ♡♡ずりゅ♡♡♡ぐちゅっ♡♡たぱんっ♡♡♡ぱちゅん♡♡ばちゅんっ♡♡ぬちゅっ♡♡どぱっ･･･♡♡

「出るっ♡全部出るっ♡教え子おっぱいに恥ずかしげもなくドロドロ濃厚ザーメン吐き出すっ♡イクッ･･･♡イクッッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

――ぼぴゅっ♡♡♡♡どぷっ♡♡♡♡びゅくっ♡♡どぴゅっ♡♡♡ぶぴゅぴゅっ♡♡♡♡びゅくっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ぼびゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ぶびゅるる♡♡♡♡♡びゅるるっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「なんだこれっ♡い、意味わかんないっ♡脳が溶けて･･･♡はぁっ♡おっ♡射精止まらなっ♡おおおおっ♡♡♡」

――びゅくっ･･･♡♡♡♡どぴゅるっ♡♡♡♡ぶびゅるるるっ♡♡♡♡びゅるぅっ♡♡♡どぷっ･･･♡♡♡♡びゅくっ♡♡ぶぴゅっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡びゅるるっ･･･♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「あっ♡あ･･･♡ハァ･･･♡ハァ･･･♡こんなの･･･♡初めて･･･♡」

――ぶぴっ･･･♡♡♡びゅく♡♡どぷっ･･･♡♡♡♡

「んっ･･･♡こんなに出しちゃって･･･♡全身ドロドロになっちゃったじゃないですか･･･♡」

「ご、ごめんユウカ･･･」

「ほんとにもう先生ったら･･･♡でも、大丈夫です･･･♡こういう時のためにアレを作ったんですから♡」

ユウカはニヤニヤしながらシャワールームを指差している。

「なっ･･･♡ま、まさか･･･♡シャワールームを増設したのは･･･♡徹夜作業に対応するためじゃなくて･･･♡射精後の処理をするためだったのかっ♡♡」

「はい♡先生の精液で汚されちゃった後もすぐに洗えるようにしないとですから･･･♡
それじゃあ、行きましょうか、先生･･･♡」

してやったりのドヤ顔で俺を見るユウカ♡

「ぐっ･･･♡こ、このドスケベタンク･･･っ♡」

シャワールームに着いた時には再びチンポがフル勃起していたことは言うまでもない。

終